慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十一年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二〇五号）

目次

信仰と実人生……近角常観……(1)
人間性と浄土教……福島政雄……(8)
堂の鈴（遺稿）……佐藤強三郎……(11)
法蔵の四十八願……花田正夫……(16)

第十八巻　第六号

信仰と実人生

近角常観

次の一文は、大正四年夏、高松市の講習会で「信仰問題の徹底」と題して一週間にわたつて講述したものの第一日及第二日分である。山陽新報社に熱心な方が居られて毎日同紙上に連掲して下された。そのまゝの収録である。（近角）

律法主義と自然主義

一

律法主義と云えば逆さに読んで法律という様なもので、こうもせにやならぬ、アゝもせにやならぬと自力修行に没頭する向きである。道徳でこうせにやならぬ、アゝせにやならぬ、マダ〳〵道徳では心の中まで徹りかねる、さらに宗教に入って心の中で仏を頼まにやならぬ、信ぜにやならぬという様なことを思うのも、共にこれ律法主義というものである。

人道の上からこうせにやならぬ、道徳の上からこうせにやならぬということが、実際そうして居らぬものである。更にそのせにやならぬと云うてしたことが果して善いかどうか。

心の中で仏を信ぜにやならぬというは自力であるが、真宗信者の人の多くが、自力と云えば蛇蝎の如く忌み嫌つて居るにもかかわらず、その心の中でやはり右の如く自力をしているではないか。信者は信者らしい行いをせにやならぬとか、善は善である、大なり小なりその善をすればよいじや無いかとか、近角が来た、講話を聴いて信ぜにやならぬとか、世間の風儀がよくないからちと道徳を鼓吹してこれを矯正せにやならぬとか、これらは皆律法主義である。

信者の人でも私はモウ信仰が出来ているという人があるが、解っていると云いながら、本当に安心ができているかどうかと考える、それが本当に安心ができているなら考える必要は無いはずである。

この如くアゝもしよう、コウもしよう、アゝもせにやならぬ、こうもせにやならぬでやって行っても、実地に臨んで実際に突当って、そのでき難い事を知ったなら律法主義も駄目ではないか。

皆さん、自分は善いことをしていると思うて見なさい。俺は善い事をしているのに他人が認めてくれぬとの愚痴がこぼれる。自分がよいことをしていると思うがために、他を恨む心が出てくる。自分が善いと思うているから、他人を悪い者として衝突ができる。自分が善い〳〵と計り唱えて居るから治まらぬのである。果して自分が善いと思われる様なものなら、親鸞聖人は罪悪の人間と云われるはずがない。アレは宗教じやから、道徳の方ではソレでよいのだと思うは誤っている。

或金満家の主人が漸次信仰をもとめて、或時私に来てくれと照会があった。私は厳重に注文して、世間体の招聘なら御免である、真実信仰問題を聞こうと云うなら行くと返事したら、真実聞きたいとのことで私は行った。その主人が云われるには、家道と宗教とがどうも衝突する、宗教では人を救え、人に施与せよ、人を憐れめなどと云うが、私の家では人に金を貸して利息を取っている、人に施与するとは反対である。宗教の方と家道の方と、どうも衝突するように思うがどうかと云うのであった。

ところが、又これを聞いて居た信者が、獪すなどりもよいというのであるから、金を貸して利息を取って居ようと別に支障はないはずじやというたが、皆共に解釈が間違っている。

又その家の番頭が私に言うには、どうも自分共が貸金を取立てるのにあたって、甚だ忍びないことがある。此方は別に利息を貰わなくても、生活に支障はないが、利息を払う先方は、その利息を取立てられるために非常な苦痛を感ずるのであって、どうもそれが見ておられません、と。そこで私はその人に云うた。元来お前さんが取立てると云う金は、御主人の金であって、お前さんの金でないからそう思うのであろうが、御主人にしては自分の物であるから、なか〳〵そんなことを思うては居られぬはずである。たとえば今お前さんと私が同じように百歳まで生きる身体として、モシお前さんが一年長く生きようとすれば、私の生命が一年縮まるものと仮定して御覧。私が生命が縮まっても人の生命を延ばしてあげようと云うような殊勝な心になれるかどうか。実際問題に突当って、人間の心がそこまでに融通がつくかどうか。その金がお前さんの物でないから、そういう同情も起ろうが、その金の持主たる御主人としては、そうはできないと思う。東京辺で罪も恨も無いものを五人六人殺して逃げて行く曲者があるのも、自分の身を逃がれようとするためである。なか〳〵自己を捨ててまで他人に善ができるものではない。

二

然るに又他力の信者の多くは云う。我々は善くしようと思つてもできぬものであり、悪い事が止まぬものであるとソレで信仰が出来て居ろうか。自分はとても善い事は出来ぬ、悪い事が止まぬと云うて、平気で居るものがある。これが自然主義である。

悪い事をしたそのままをお助けと云うて安心して居るのは、その悪を自ら許して居ると云うものである。私方へ来る感心な人があつた。其人は貿易に従事して居る人で、これもお慈悲、あれもお慈悲と云うて非常に喜んで居られるもつとも氏の喜ぶは、青年の人達には何を喜ぶのかと思われるであろうが、近年青年の思想界には、宇宙すなわち仏であるとか、自然すなわち仏であるなどと云うて、喜んで居るものもあるようじやが、その喜んだのは、渡るに船なき難度海を向うから船を仕立てて待つてござる、闇に迷うて光の無い処へ光明を放つて迎えて下さると云う、仏の大慈悲心を喜ぶのである。従来は人生の内部に宗教と云うものがあると思うて居たが、そうではない事を感知したと云うのである。人生の内には政治あり、経済あり、教育ある如く、宗教も其内に介在して居るものと思うて居たのが、宗教の上から人生は蒼海の一粟と云うことを感知したものである。

青年の人が問うた、人生の意義如何と。私はこれに答えて人生に意義などがあるか、人生は生老病死の渡り難い海じや、無明が人生じやと云うたことである。近頃その人生の意義をとらえんとする思想があつて、非常に苦しんでいるが、全く人生は暗である。その闇を唯一人の光が照らしたまう、それが尽十方無碍光如来じや。

然るに人生という中に宗教を入れるからいかぬ。人生は無明の闇、難度海である。この人生には何等意義あるものでない、而してこの闇、この海を救わるるものが如来なのである。

人間は争いの心が止まぬものである。彼は悪い、彼は無理じやと、五分々々の争いをする心が止まぬ。其の心は悪いと知りつつも止まぬ。其の止まぬ心は悪いが、その悪い止まぬ心が可愛相じやと云うのが如来のお慈悲なのである。ソレ程に五分々々の争いの止まぬ苦しい浅ましい心を察せられて、お助け下さるのが仏の真実なんである。之は卑近な譬であるが、人に借金をする、借金すれば返さねばならぬと同様に、我々は罪を滅さねばならぬ、悪を消さねばならぬ、借金は返さねばならぬと云う事は之れ律法主義と云うものである。然るにまた借金を返さねばならぬが返すに金が無い、金が無いから返せぬ、其の内に利息が積る、益々返し難くなる、愈々返せぬ。どうしても返せねば仕方

が無いじや無いかで済ましている、之れが自然主義というものである。又信仰に心掛ける人は云う。仮令返さないでも好いと云う人ありとも、返さねばならぬが、さて返すに返せぬから仕方が無い、返さいでも好いと云うのだから、返さいでも好いでは無いかと。概ね真宗の普通信者はソレである。返せぬから返さいでも好い、返されりや返せと取って居るが、そこが間違って居る。そこでとても返されないその金を返そう〳〵と苦労する、その心が不憫である、その能ないのが気の毒であるから、ココに拵えた此金をつかえ、返すが至当じやがとても返せないのを見抜いた我は、可愛相じや気の毒じやから、ここに造ってある金を持って行け……と云われた時の心持は如何であろうか。しない、できないものを、できる〳〵と力んで居るような浅ましい我等……尽未来永劫の間借金を返す事のできぬこの浅ましい罪悪深重の凡夫を救わんとての本願である。喧嘩する心を憐んで、手向いして我を叩くも蹴るも構わぬが、その叩いたり蹴ったりする心が、いかにも不憫であると、今日三毒五欲の種を争うて居る我々の心を憫れむ無量の慈悲を感得して、その根の絶ゆる時、煩悩の花が咲こうとてモウ根の縁が切れて居る。然るに修行信者は心を躬ら洗おうとする。この汚れた心を躬ら洗うて、真に直そうとするのが真じやと思い、一方は又この汚れた心其儘が真心じやと思うているが、両者ながら未だ真心では無い。即ちこの真ならざる心を憐んで下さる仏の真心を信ずる心が真心である。『歎異抄』に、罪悪深重煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきが故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきが故に……とある。実に我々の心は炭団なり炭なりである。之に仏の真心の火を移して鉄をも鎔かす力が出来ると云うものであります。

信仰より来る人生観

一

皆さん方はモウ信仰問題の徹底して下された事と考える。そこで之より信仰問題の帰結と共に、信仰より来る人生観に就いてお話をする事に致します。要するに先達て以来お話を致した処は、この人生は一も思う様にならず、人生は闇黒である、律法主義でも、自然主義でも行けない、進むも退くも儘にならぬもの、信仰の得られぬのも人生の一つの突当りである。そう云う致方の無い人生を憫んで下さって、何処々々までも遺瀬なく思召し下されると云う事は先達て来申した通りである。人生は何とも致方がない、皆さん一人々々考えて見て御覧。自分は何不足なしとせらるる人がココに在るか何うか。人望もあり財産もあり学問も

あり、一見何不足のないように、他も思い自分も許して居ながら、さて思うように許すようにならぬのが人生である。昨夜も或人から問われたが、先生の云う様に仏様が判らぬ……と。私の云う事を聞いて、仏様を見ようとしているのが第一間違いである。如来は我能く汝を護らんと仰せられてある、この能くという字に対し親鸞聖人は「対不堪也」「対疑心之人也」と仰せられてある。堪えざるに対するのである、及ばざるに対するのである、疑う心の人に対するのである、迷う心の人に対するのである。即ちその不堪…疑心……を何処々々までも助け了せんとである。いかない〳〵と謂うて居っても、何うか信仰を得ようとするのは自力である。いかないというその苦しみを不憫と思うて下さる真実が他力で、その他力の真実を戴くのが信仰である。いかない者は何処までもいかないのじや。愚者が役所へ行って、何うか斯うして下されと腰を屈め頭をさげて、いかないと云うものを拗く頼んで居てもいかないものは不可なのである。信心は求めて得るのじや無い、人生の遺瀬ない処を何処々々までも不憫と思うが如来のお心、如来の真実なりと聞けば宜いのである。私の思う通りに出来ない処を憫んで下さるので、私の思う通りにして下さるのではない。

吾々が洪水に会うて難儀していると聞こし召された天皇陛下は、いかにも不憫なものよ、と早速侍従職を差遣わされて、汝等の難儀を何処までも不憫と思うぞ可愛く思うぞ、どんな跛でも盲でも見捨てはせぬぞ、食物を与えるぞよ、衣服も着せて遣るぞと仰せ下された時、その御言葉計りじやない、その大御心の御真実を戴かねばならぬではないか然るに其の大御心の御真実を戴かずに、唯思う様にして下されとは何事じや。放蕩息子が可愛相じや不憫なものじやと憫れんで呉れる親の心にあまえて、不憫と思うなら金くれ……と手を突出すようでは不可ん。ソンナ手はピシヤリと撥いて遣るくらいなものじや。如来の真実は……金くれたら好いと突出した手を撥いて置いて、ソシテ息子の心を憫れみ、ソンナ浅間しい心の者を何処までも見捨てずに、遣瀬なく思召すのである。私の知っている某家の息子が他処で不義理な借金をして居つた事が親父さんの耳に入つた時、親父さんは息子を呼んで、貴様は何故ソンナ借金をするか、此処だけは払つて遣る、今後は決してソンナ処へ足踏してはならぬゾツ……と叱りつけた上、件の金を渡して、此度は借金だけを払ってやる、早く持って行け、旅費は遣らぬぞ、先方へは八里の道程、宜しく徒歩いて行くが好い……と厳しく戒めた。息子は恐れ入って直に身仕度して出立した。後で親父さんは母親に対って、アノ子に小遣いをやったか汽車賃を渡したかときいた。イエ何も遣りません、貴夫が汽車賃もやらぬとおっしやって居られましたから…

馬鹿な、おれがアア云うて居てもお前が陰でやるだろうと思うて居たのじや。汽車賃も無しで何で福島三界まで行けるか、早く番頭に持たして跡を追わしてやれ……と命じた。番頭は心得て早速息子の跡を追い、悄然として歩み行く後から呼止めて、貴郎はこの暑さの折に徒歩で福島までは御難義だろうとお母様から汽車賃と小遣銭を托かって参りました……と手渡した時、その息子はモウとても汽車には乗れぬ、歩いて八里の道を行かねばならぬことと思うていた、折からの母の慈悲を聞いて、ワーッと泣き伏したと云う。ソコである。其の刹那の心持は何うか、この不孝の私を左程までに思召下さるかと、親の真実を戴いた時の心持は何うか。真実とは、偽りならざるを真と云い、空虚を充たすを実と云う。偽らず而して空しきを満腹させるの真実である。

二

しかるに天災に苦んで居るものが陛下の救いの声を聞き大御心の御真実を其儘戴けば好いのに、アアではいかぬ、コウではならぬと、要らぬ気配りをして見たり、下さるのじやから下さるものを貰って置けばよいではないかと云う側と、下さると云うてもソウは行かぬ、下さるともまた此方は出来るだけ善いようにせにやならぬでは無いかと云う考えの人もある。高松の信者の中には此種の人が多くはないか。我々の難儀をみそなわせ給うて侍従職を御差向け下さるのに、せめては及ぶ限り立派にして御歓迎もし、御待遇もせにやならぬなどと、要らぬ気配りをするは間違いで、陛下におかせられては、汝等が立派にして迎えるに及ばぬぞよ、又馳走などを心配するには及ばぬぞよ、ソンナ事のできる筈でない事を知ってこそ、不憫と思うて使を遣わした事である。衣物なり食物なりを持たせて遣ったは汝等が一物も一食も儘ならぬと云う事を見抜いて遣わした訳である。ソレが汝等の自由になる事ならば、侍従職をして草鞋がけで態々差し向けはせぬぞとの御真実を、如何にも戴く事の出来ぬと云うは、南無阿弥陀仏の因を建立し給える如来の救いの真実と了知する事ができぬと云う者である。然るに又一方では貰って置け、下さるのだから幾許でも貰って置けと云う様な事ではならぬ。斯く迄御真実の思召なる彼の因を建立し給える御心と戴かねばならぬではないか。私の様な者に有難い事をおっしやって下さっても、私は私として何とか為にやならぬと云うているならば、ソレが邪定聚の方で自力根性が残って居って信仰には入れぬ。又一方の構わんと云う方……貰って置けの方は不定聚であって是亦信仰に入れぬのである。全く明信仏智となって来ねばならぬ。そこで

人生……信仰、　信仰……人生

となって、人生のあらゆる苦しみが信仰に救われて、其の

信仰から光ある人生、意義ある人生となるのである。吾々の闇黒なる人生が、如来の真実を戴き信仰に入り、信仰より溢れ出でて光明ある人生となるのである。そこで信仰から来て御恩報酬の生活となり、義務じやの義理じやの思わずして、此の罪の重量、借金の重量の為に、何事をしても面白くなかったが、此の重量を見捨てぬ真実の為に満足して愉快に、否その真実で充実せしめられ、満腹せしめられる為に、地獄におちても後悔せぬとなるのである。之が親鸞聖人の、……たとえ法然上人にすかされたてまつりて念仏して地獄に堕ちたりとも更に後悔すべからず候……の仰せなのである。斯うなっては如何なる迫害、災難に遭うたとて、首刎ねられたとて更に頓着ないと云う境界となる。然るに徹底せぬから中途で迷うて居る。どん底まで達せねば浮き上らない。沈みもせずして中途でフラ〳〵している と、何時までも浮き上る事は出来ぬ。一旦水の底に沈んでからでなくては浮上れるものでない。私が道徳実行を説かぬと云うも、徹底の碍げとなるからである。何を差措いても徹底が急ぐのである。

そこで愈々徹底すると、この世の因縁終るなり無上菩提を得て真如法性の境に住し、仏の浄土にゆく。浄土に行つたなら、ソコで還相廻向は自然にできる。彼の『正信偈』の……即ち真如法性身を證じ煩悩の林に遊んで神通を現わし、生死の園に入て応化を示す……である。仏は御真実によつて我を救わんとし給い、我々が助けて頂くと此の煩悩の花盛り、生死の林の中に再び現われて、思うが如く衆生を利益することが出来るのである。

そこで要するに私共重い煩悩の荷物を持つて、生死の海に浮かんでいるものは、この我を救わんと大悲の願船に棹して迎え給う御真実を戴けば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば至徳の風静かに衆過の波転ず……となるのである。諸仏菩薩の力で助からぬ我々の病気を、阿弥陀仏の手で助けられるのである。然るに真実の信者は諸仏菩薩の力が足らぬと云う様な態度を示すのは、間違つた次第、私の方が罪深くして諸仏菩薩が、善をせよ悪をせなと云うて下されても、その通りに私の方ができぬのである。その出来ぬ私を心配すな助けてやるぞよと阿弥陀仏の広大なる御慈悲であれば、そこで有りと有らゆる諸仏神々もこの名薬の発明を讃嘆せらるると云うものである。心だにまことの道にかないなば祈らずとても神や護らん。仏のこの広大なる真実を信じたならば、祈らずとも諸仏諸菩薩神々はお護り下さると云うものである。すなわち我々は南無阿弥陀仏一つで日暮らしさして貰い、南無阿弥陀仏一つを以て報謝をさせて戴くのであります。

人間性と浄土教

福島政雄

我々は人間を善いものと感じているか、悪いものと思っているか。人間というと漠然として了いますが、自分をどういうものと感じているかという事を考えて見ると、先ず自分が悪いと思っている者は居ないという風な状態であります。自分が悪いと口にする者はある、私なども時々口には言うが、腹の底では、まんざら棄てたものでもないという気持ちをもっているのであります。自分はどうにもならぬすたった者であるとは感じて居りません。表向きはとにかく、本心は自分を悪人とは感じて居りません。その証拠には、私達が自分を「悪魔である」と自ら言うとき、それを聞いた人に「そうだ、お前は悪魔だ」と言われるとなると、変な気がする。ドイツに居た時、親しくなった下宿の奥さんに、私が或時「自分は実に悪魔のようなものだ」と言ったところが「そんな言葉は、我々の国では人を釣る言葉だという」と言われて、ギャフンとなった事を思い出します。実際そうで、多田鼎先生が「我々には釣銭を求める心がやまぬ」と言われていましたが「お前は悪魔だ」と言われると、そんな積りではなかったと思う。そう云うのが現実であって、言葉というものは嘘なのであります。自分をよいとは思うが悪いとは思えないのであります。

人間性を、善と見、悪と見るとなると、善とか悪とかの相対論になりますが、仏教ではこのような、善悪の争いをしない。

自分がよいものだとしか思えぬのが現実であるが、その現実を、今一つ深い所から照らされるのが、仏教の人間性の問題であります。人間の現実を見て、その奥に徹する所に、人間というものに無限の涙が注がれて来るのであります。そこに仏教、特に浄土教の心持ちが展けて来るのであります。つまり、悪い〳〵と思いながら、結局本当に悪いと思えない衆生を、涙を以て見透す仏に会う所に、人間性の問題の解決がある。

善と片附くのでもなく、悪と片附くのでもない、片附か

ぬ所に深刻性を持つのであります。一を三で割って行きますと、循環小数で無限に三が続きます。いつまでやっても三が続くだけだと判っているが、しかも割らずに居れず、三が立ち続くのが人生の現実であります。

これを割らずに居られぬのは煩悩だと言って1/3と片附けてしまえば、それは解りはするが、けれども解って居りながらやはりどこ〳〵までも割らずには居られぬのが我々の現実であります。

善だ悪だと考えながら、実は悪。悪だ悪だと思いながらやっぱり悪であるという矛盾を、繰り返し〳〵して行くのが人間性なのであります。

そして人間性はこういうものだという事を徹底的に見透す力は我々にはない。あるように思えても、それは思えるだけの事である。

それを、この人間性の、三三三……と続く無限の彼方まで見透すのが、仏陀の力なのであります。無限に不合理性を続ける現実のいのちというものの極限を見透して、そこに限りなく憐みを注がれる、そこに仏陀と衆生との出会いがあると思う。

人間性が善だからよいというのでもなく、悪だから悪いというのでもないのであります。一体私達が人間性を否定して落着いていられるものかどうかが大分問題であります

以前ペスタロッチの人道主義的宗教観を批判して、ペスタロッチには一種のヒューマニズムがどこ〳〵までも残っていて、それが人間として人間を惹きつけるが不徹底を免れないと論じたものを公にして、キリスト教の或る人の怒を買ったことがありましたが、その折の事を今考えると、私はそこでペスタロッチを攻撃したのか、私自身を攻撃したのか判らず、多分後者であろうと思うのですが……、つまり人間性への愛着はなか〳〵抜けきれませぬ。一種のヒューマニズムをどこ迄も立てて行きたいのであります。

我々が人間の関係を踏みにじって、念仏して安んじ得るかどうか、それは大分問題なのであります。今夏、黒谷で行いすましている尼さんの所に二三の人々と泊めて頂いたことがありました。その尼さんを見て、一面感心もしたが、一面、例えば私がこんな生活に耐え得るかどうかを考えると、どうも人間性を断って、とび抜けて了っている、こんな生活が、私の生活として成り立つとは思えませんでした。それ程人間性に未練を断ち切れぬ、それを断たねば仏法ではない、と言われゝば、私のは仏法ではない。人間性を断っての浄土教なら、私はそれを戴く資格はありません

それを近年殊に思うのであります。若い時はまだ未練がなくて人間性の否定論もしたが、年をとり、死に近づくにつれて、人間性への愛着が深まる事が判って来る。三十代

のような歯切れのよい否定論はやる事が出来ません。これが人間の駄目な所と思う。若い時は理想が勝っているが、老境に入ると、自分が自分の言ってきたようなものになっていないし、その行路が実に惨めなので、人間としての自分にはそれが言えなくなる。そして未練の多い、執着の切れないもので自分はあることを念々に見せつけられる。老境に入ったものが、仏法の上では煩悩を断たねばならぬと言うとすれば「あゝ断たねばならない、自分は本当になっていないが」と言う感じで物語るのだと思う。

こう云う自分をそこに置いて大無量寿経を見てみると、その五悪段には、この様な人間性が、仏によって徹見せられているのであります。それは私のいのちを告げ知らしたものである事がわかります。

この仏語は、微に入り細にわたって、殺し合い、欺し合い、愛欲に乱れ、権力欲に使われ、めちゃくちゃな人間性を説いているのでありますが、その言葉には何が籠っているか、いつも感ずるのでありますが、それは親の真心が籠っているのであります。それは衆生の姿を冷やかに批判し、解剖したものではない。久遠の親が衆生の動きの姿を一々指し示しながら教えて下さる真心の言葉であります。だから成程そうだと受け容れる事が出来る。皮肉に、冷たく言われているのではなか〳〵受け容れる気にはなれません。

又皮肉でなくても、理想に鞭打つものとなると、善意は感じながら非常に痛く思えるものであります。

私は前から山上の垂訓をこの五悪段に較べているが、あの理想に鞭打つ悲痛な趣は、青年時代には感激するが、老年に入って、腑甲斐ない自分を知らされて来ると、鞭打たれても自分はどうにもならないのだと感じて来る。

同じ様なことでも五悪段になると、涙を以て懇々と説かれているので、成程、親の言われる通りだと素直に受け容れる気になるのであります。

キリストは自ら人間性の不徹底に悲痛して呼びかけ、そこに共鳴がある。

五悪段の仏陀は、悲しみはあるけれども、それは親の悲しみで、我々の悲しみを皆胸の中に容れて、人間性を底の底まで明かにする趣があります。そこでは我々の不徹底は、その慈光に照らされて仏陀の胸に安らうのであります。親の暖かさが私のいのちの中心に徹して、私にどこ〳〵までも涙をそゝいで、私を背負って生きて下さる大いなる仏の力を感ずるのであります。

今日は親鸞聖人のお言葉には直接に触れずに、お話をしましたが、聖人もこの様な事を言って居られるものと私には考えられるのであります。

昭和廿一年九月廿五日、至心寮講話、要旨筆録

堂の鈴（十九）遺稿

佐藤強三郎

慰問（一）

刑務所でも、お小夜の特技を認めて、後には石膏細工をすることも許可した。そして所内即売会の評判になった。

信哉はまた訪ねて来た。

小夜「どうして貴方はこんなに度々私を訪ねて下さるのですか」と不思議そうに聞いた。

信哉「お藤さんに頼まれたのです」

それを聞くなり、エイ、と頭をあげ、眼を丸くし、口をキリッと結び、唇をビク／＼と震わし、力一杯手を握り締めて、信哉を見つめた。信哉は、またたきもせず正視したお小夜は次第々々に頭を下げ、うなだれて、ジーと動かない。

信哉「私はお藤さんの心情を聞いて泣かされました。お小夜さんがお気の毒だから、何とかしてお小夜さんを慰さめてあげて下さいと、私に頼むのです」

お小夜はうなだれて、一言も聞きもらすまいと、眼をまるくした。

……

お小夜は内心に〈そんなことがあるだろうか〉と驚いた。〈お藤さんは、自分が殺そうとした、その人でないかその人が、この仇の自分を、慰問するなんて、どうしてそんな気持になったのだろう〉

信哉「現に私が、この眼で見この耳で聞いて来たのです」

お小夜は信哉の顔を穴のあく程見つめた。信哉もまた、真剣に見返した。信哉は座り直して、

信哉「本当です」

それを聞くや、お小夜は、ワァーと泣き伏した。

……

お小夜はその夜考えた。こんな不思議があるだろうか。自分はお藤を殺そうとした女でないか。その仇の所へ、わざ／＼人を慰問によこすなんて、そんなことがあるだろうか、それが本当であろうか。

昔自分は初婚の夢破れてついに離婚するようになった。くやしくて忘れられなかった。あの人に女が出来、その女に主人をとられてしまったのだ。私が遂に敗けてしまったのだ。……それから相手の女を呪って／＼今でも憎み続けている。その淋しい折に、丁度あらわれたのが、一郎さんであった。自分は離婚の苦痛を知っているから、初めは一郎さんを、お藤さんから取りあげてしまうなどとは露程も考えてはいなかった。毎日々々淋しい味気ない日を送って、心の遣り場に困って、何かにすがり度い、つかまりたいと探していた時に一郎さんに遭ったのだ。一目惚れとはこのことか。自分ながら自分の心がわからない。時々一郎さんにお目にかかれば、それで満足であった。

それから私は、自分のお茶は勿論、人様のお茶まで周旋して取り次いだ。次第々々に沢山買ってあげる様になった。一郎さんから「ありがとう、お蔭様でだん／＼店も繁昌します」と喜ばれるのが何より嬉しかった。

ある夏、台風が急に来て、直江津で汽車が不通になってしまった。これ幸と、お茶売りに来た一郎さんに強いて泊って貰った。それから二人の仲は段々濃くなっていった。三十過ぎた自分は、一日々々と、燃えさかって行く情炎を自分でどうすることも出来なくなって行った。

それでも、自分は蔭の女として生きて行こう。一郎さんの正妻としては、どこまでもお藤さんを立てて行こうと思っていた。

然しそうすべきであるとは思うが、又ほとばしり行く情熱は、心にも余り、身にも余り、消そうとすればする程ます／＼燃え上って、どう止めてよいか、思案に余るばかりで、押えて見様がなくなり、遂には湯沢温泉へ一晩泊りで一緒に行くようになった。

……

ところが、悲しいことには、意外にもその大事な一郎さんが、遂に不意に私と絶交し、完全にお藤さんの許へ帰って行った。大事な人を取り返されてしまったのだ。そして商売までも私としなくなってしまった。もう会うことも出来ない、縁の糸が切れてしまった。

あゝ一郎さんも憎いが、お藤さんはなお憎い。お藤さんも女でないか。女であれば恋心は知っているであろう。察しているであろう。焦がれている人を、会うことも出来ず話しも出来ないように引き放してしまうとはあんまりである。考えて見れば私も悪いにはちがいないが、これほど私を苦しめなくても、よさそうに思う。

お藤さんは無情な人である。

……

時々、冷静になると、自分は人様の大切な主人を盗んだひどい女であると恥かしくなる。主人が奥さんの所へ帰って行くのは当然のことである。自分が不義をしていて奥様を恨むなんて、憎むなんて、こんな理不尽なことがあるだろうか。申し訳けのないことであるとも思う。

然し、現に一郎さんを取り上げて、もう会わさぬようにしてしまったお藤さんのやり方もヒドすぎる。憎くて憎くてしようがない。その上近頃は可愛い子供まで出来て、二人は一層睦じくやっている有様を見せつけられゝば、美しくて目がくらみそうである。

このようにのぼせあがって、遂にあんな大それたことをしてしまったのだ。

これ程自分はお藤さんを呪い通して来たのだ、憎んで来たのだ。——それだのに、その仇の私を慰めようなんて、とても考えられないことである。そんなことがある筈がない。たしかに考えられないことである——と思い悩んだ。

……

ある日、あゝわかった、と膝を叩いた。三年たてば私が婆婆へ出る。私が此処へ入っている内に親切ごかしの事をやって、私の良心をよびさまし、内心から私を苦しめようと云うのであろう。ああ、いやだ〳〵。

そんなことをやる位ならいっそ表からハッキリと、お藤自身がこの刑務所へ面会に来て八どうだ、思い知ったか。人の大事な亭主を盗んだ泥棒はこんな目にあわされるのだ良い気味だあたりまえのことだVと、なぜハッキリ面と向って言わないのか。私としてはその方がよっぽど気持がよい、気がさっぱりする。

それが何だ、慰問だなんて、丁寧ぶる奴の気が知れぬ。ひねくれすぎていて気に喰わぬ。蛇を生殺しにするような真綿で頸を締めるような、そんなやり方なんて胸糞がわるい。こんな裏腹の親切を三年間もここでやられ、出てからも何時までもやられたらたまったものではない。つまらぬ見栄はやめてくれ、そちらは世間態は良かろうが、こちらはたまったものではない。キット親切風を吹かすだろう、そうするに違いあるまい。何だ胸糞がわるい、こんな変った方法で敵討をやるつもりなんだろう。ああ、こんな敵討なんて聞いたことがない、見たこともない。こうして私が刑務所を出てからも将来永久に私の良心を苦しめようと深く企むでいるのであろう。そのために先ず私の今日の生活から、私の性質、好き嫌い、考え方など、細かに調べたいのであろう。そうしておいて私が出てからあの手、この手でユックリと、ジワリ〳〵と苦しめて来るのであろう、本当に残酷なやり方である。ムゴイやり方である、それでも人間か。これはうわべは親切のように見えても、その奥に深いむごいたくらみがかくしてあるのだ。誰が考え出したのか、思ってもゾツとする。

これの入れ智慧はお藤でなくて、あの信哉であろう、そうにきまっている、これは大いに警戒せねばならぬ。

……

昔、私も考えたことがある。また実行したこともある。それはどうして一郎さんに近付こうかと苦心した時、一郎さんの気持はどんなものであろう、好き嫌いはどうか、ネクタイの好み、靴下の色などと、あらゆる所へ気をくばって調べたものであった。その頃、金が無くてもお茶を買い、如何に腹が立つことがあっても顔に出さず、どんなに忙しい用があっても、今暇ですからと、自分のあらゆる不都合を忍んで、一郎さんの気に入るようにもてなした。こうして長い間苦労したおぼえがある。その甲斐があって、遂に一郎さんを恋のとりこにしてしまった。

その後お藤との仲にひびが入り、一郎さんは生れて初めてのひどい苦悶におちいった。そして京都あたりまで放浪した。が、またよりが戻ってお藤の許へ帰ってしまい、遂に私と別れることになってしまったのだ。

……

相手をトリコにするにも、相手を本当に苦しめるためにも、先ず相手の気持を知らなければならぬ、心を摑まなければならぬ。それには、どうしても第一歩として親切にもてなさなければ道がひらけて来ない。敵を攻撃し、苦しめるには、先ず敵情をよく偵察しなければならん。お藤は信哉と組んで、それをやっているのだ。これは大いに警戒しなければならぬ。

私も昔、自分の感情をおさえ、都合の悪いことを忍んで一郎さんに尽し、うまく成功したこともある。然し悪事は長続きするものでない。遂に失敗して一郎さんを永久に取り返されてしまったのだ。

あの連中も、自分を苦しめようと、余計な企みをやっているのであるが、私さえあざむかれなければ、あんな悪い計画はきっと泡の様に消えてしまうだろう、夢となるにきまっている。この自分がそうさせて見せる、いやそうさせずにおくものか。あの一派の慰問なんかウッカリ受けられるものか。決してもう受けまい、どうして受けるものか

……

然し、あの時、信哉は涙と共に真剣に語ったのだ、あれは本当かしら、嘘でないのかしら……。

ナーニ、信哉といえども人間だ。人間なら損得ずく、情欲ずくで動くに決っている。それで動かぬ人間なんてある筈がない。金と女で動かぬ者は、木仏金仏だ、そんな者には人間の血が通っていないのだ。あの連中は一つ穴の狐に

決っている。

私も一郎さんを一眼見てから、どうして深く交際しようかと明けても暮れてもそのことばかり考えこんだ。そのためにはいくら金を使っても惜しくなかった。そして友達を欺き、母をだまし、一途に一郎さんの事ばかり心に画いて会う機会を造った。そして何もかも捨て、恥も外聞も忘れて、どんな遠くへも出かけて行って遭う瀬を楽しんだ。

一心とは恐ろしいものだ、今迄自分の何処にこんな勇気が潜んでいたのか、どうしてこんなによく気がつくものかと不思議でならない。

又一郎さんから「忍耐して待て」と言われると、何時までも自分を殺して忍ぶことが出来た。思いつめると、不思議な力が出るものだ、一年経とうが、二年経とうが、三年たとうが、必ずそれを成し遂げる力が出て来た。

彼等の狐共も、三年待とうが、四年待とうが、どうしても私に仇討をしなければ止めないであろう。その気持はよくわかる、そうに違いないと考えて、身を震わせた。

○

ある日、信哉はまたお小夜を訪ねた。

信哉「近頃どうですか」

小夜「別に変りはありません。私はこうして此所につながれているのですから逃げも隠れも出来ません。三年間は絶対大丈夫、此所に居ます。私は仇ですからネ、どうぞ私をこれ以上かまわんで下さい」

と顔をそむけ、剱もほろろの挨拶である。信哉は一寸ビックリしたが、いや〳〵ひがむのも無理もないと思った。

信哉「そうですか、それじや」と静かにおとなしく帰ったその途々に思った。人煩悩に狂うものは、強情を通すことのみにかかって、物事の本性を見ることが出来ないものだと教えられたが、本当にそうだ。心の濁っているものには正しく物を写す事が出来ない。人を信ずることが出来ないおのれをも、世間をも信ずることが出来なくなる。淋しいことだ世界中何処にも信頼する者が居ない一人ぼっちだ〉

……

その後、信哉はまた刑務所を訪ねた。

信哉「これは大観画伯のかいた富士山の景色です。コロタイプですが」と云って出した。またその後も時々出掛けて、観音様の絵、雪舟の山水と種々届けた。春は桜、夏は山水、秋は菊、冬は水仙、福寿草と、時節のものを選んで持参した。お小夜が会わねば、受付に頼んで置いて帰った。

（続く）

法蔵菩薩の四十八願(三)

花田正夫

三十一、設い我れ、仏を得たらんに、国土清浄にして、皆悉く十方一切の無量無数不可思議の諸仏世界を照見すること、なお明鏡にその面像をみるが如くならん。若しからずば正覚を取らじ。

この願は国土清浄の願と呼ばれます。浄土はきよらかな光に満ちていて十方一切の無数の諸仏の世界が、鏡に自分の姿を写すように明らかに見えるようにしたいとの願であります。

清らかにみがかれたひずみのない鏡には一切の景色がそのままに映るように、清浄な浄土はその土徳として世界中のあらゆる聖賢の教が、わが身を照らす鏡としてうつって来るのであります。そこで浄土に帰することが諸仏に帰することに自然になるのであります。

三十二、設い我れ、仏を得たらんに、地より已上、虚空に至るまで、宮殿楼閣、池流華樹、国の中のあらゆる一切の万物、皆無量の雑宝、百千種の香をもって、而も共に合成せん。厳飾奇妙にして諸の人天に超えん。その香あまねく十方世界に薫ぜん。菩薩聞かんものみな仏行を修せん。若し是の如くならずば正覚を取らじ。

この願は万物厳飾の願とも宝香合成の願とも云われております。浄土の大地や空中にあるものは、宮殿も池も樹も皆宝で出来あがっていて、そこから芳しい香りが薫って行き、それを感じたものは自然に仏道を修行するものにさせようとの願であります。

私共は「孟母三遷の教」ということをよく聞かされました、それは孟子の母が子の教育のために、居所を最初は墓地の近くに、次に市街の近くに、最後に学舎の近くにと三度遷したという故事であります。又、麻の中の蓬は直い、と申します、地を曲り這う性質の蓬も、真直ぐに生長する

麻の中では直ぐになるものであります。

さて一切衆生を迎えいれて、ただちに成仏せしめようとの法蔵菩薩の悲願は、まず浄土を七つの宝で満たし、その宝から芳しい香りが薫じて、そこに生れる者は自然に身も心も浄化せられて、仏道を成ずるようにと誓われるのであります。

(註)以上十七願から三十二願までを摂衆生の願と呼ばれて衆生の往生の因と果を誓って下さったのであります。

〈種々利益の願〉

三十三、設い我れ、仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏の世界の衆生の類、我が光明を蒙りてその身に触れん者、身心柔輭にして人天に超過せん。若ししからずば正覚を取らじ。

触光柔軟の願と呼ばれ、第十二の光明無量の願の別益であります。ことに瞋恚の煩悩の興盛な私共を悲愍して下さる願であります。

十方の世界の衆生が、仏の光明にそだてられて、仏のまことを身にうけるようになると、身も心もやわらいで、非常にすぐれたものとしたいとの願であります。歎異鈔の第十六章に「わろからんにつけても、いよ〳〵願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心もいでくべし」とありますのは、この願の利益であります。私共は何時もいかり、そねみ、ねたむというこわばった、くらい心になりますが、その苦悩をわがこととして同悲して下さる方のましますことによって一縷の光明を得てやすらがせて頂けるのであります。

三十四、設い我れ、仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏の世界の衆生の類、我が名を聞きて、菩薩の無生法忍(本来不生不滅の真如のことわりがわかること)諸の深総持(ダラニー、ここでは六字名号の意)を得ずんば正覚を取らじ。

この願は聞名得忍の願と呼ばれます。どんな衆生も、名号のいわれを聞いて信じたものは、生死に即してさとりの世界を感じ、かず限りもない大功徳と深い智慧を授けるようにしたいという願であります。

釈尊の御在世の晩年、王舎城に大悲劇がおこりました。阿闍世王が父を害し、母を幽閉するという大惨事であります。然しこれを縁として母韋提希夫人は、仏の御導きをうけて「わがために浄業を修して下さる方」のましますことを

拝して、業報をもったまんま安んずることが出来ました。私共もまた名号のいわれを聞いて、大悲の本願に帰入するとき、韋提希と同じ喜びを頂けるのもこの願の力であります。

この願によって、この世にあるまんま、正しく浄土に生れるに定まった身とさせて頂けるのであります、それでこの願を第十一と十七の願の別益とされております。

三十五、設い我れ、仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界に、それ女人ありて、我が名字を聞き、歓喜信楽し、菩提心をおこして女身を厭悪せん。いのち終りて後、また女像とならば正覚を取らじ。

これは女人成仏の願で、第十八願の別益と云われます。それは、すでに十八願で十方のあらゆる衆生をのこらず救い遂げずばやまじとお誓い下さっているので、その中に女人の成仏も含まれている筈であります。それなのにこの願で、特に女人を呼びかけられて、一人も救いの手からもれないようにと誓われるのであります。私共もここに仏の大悲の深重さを仰ぐのであります。

男子は外に出て働き、女子は家をまもって子を育てるのが常のならわしであります、そこに男は万事に積極的で、女は比較的にひかえ目であります。それは女人の特徴であります。仏法を聞く上にはさまたげになり易いのでありますが、仏法を聞く上にはさまたげになり易いのであります。そうした女人の持つ微妙な心を洞察されて、重ねての願をおこされたのであります。

大逆の王阿闍世が、その非をさとって大懺悔におちた時耆婆大臣が力を尽して、釈尊の御前に誘うのであります。待ちに待たれた釈尊は「大王よ」と呼びかけられましたが、王は自分の如き大悪人を仏が大王よと呼ばれる筈はないと思いこんでいて誰か王らしき者はと、四囲をかえりみるのであります。仏は己が罪に障えられて、わがことと思えない阿闍世を悲憐されて「阿闍世大王よ」と重ねて呼びかけられると、はじめて王はわがことと驚喜して「仏心平等にして更にへだてなきを知れり」と随喜しています。

仏心は平等であります、真に平等に徹していられる故に差別に即して下さるのであります。親は子供を全分の心をもって平等に愛します、それだから女子は女子らしく、男子は男子らしくそれに即して育てて行きます。

平等にして徹底した仏心にふれて、女人は女人のさわりを懺悔し、男子は男子の罪業を慚愧するのであります。五悪段の一言一句は皆男子の罪業であり、三従五障の女人とは女人が仏心のひかりを身にうけた告白であります。

三十六、設い我れ、仏を得たらんに、十方無量不可思議

の諸仏世界の諸の菩薩衆、我が名字を聞き、寿終りての後、常に梵行（きよらかなおこない）を修めて仏道を成ずるに至らん。若ししからずば正覚を取らじ。

常修梵行の願であります。十方の世界の道を求める者が阿弥陀仏の名号を聞くと、浄土に生れてたえず清浄な行いが出来るようにしたい、との願であります。

この願を第二十二の還相廻向の願の別益と呼ばれます。浄土に生れた者が再び現世界に還って、煩悩に汚れ濁った者を無限に浄化出来るようにしたいとの誓いであります。

私はこの願から、浄土から還来される大菩薩のお導きを知らされるのであります。親鸞聖人は聖徳太子を観音菩薩、法然上人を勢至菩薩と渇仰していられますが、私共も無数の大菩薩の慈育を蒙っており、その力で限りなく濁る身も転悪成善されて、念仏成仏せしめられるのもこの願のめぐみによるのであります。

三十七、設い我れ、仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸天人民、我が名字を聞きて五体を地に投じ稽首作礼（頭を地につけて礼すること）し、歓喜信楽して、菩薩の行を修めんに、諸天人民、敬を致さずということなけん、若ししからずんば正覚を取らじ。

この願を人天致敬の願と呼ばれます。十方世界の衆生が弥陀の名号のいわれをきき、一心に帰命し、礼拝して、信心歓喜の上から、報恩の大行を修めるものは、天地の神々や、世間の人々から必ず敬われるようにしたいとの願であります。

古歌に「心のみまことの道にかないなば、祈らずとても神やまももらん」とありますが、まことなき凡愚の身が、まことの道にかなう唯一の道は、まことなき身をまことなき身と深信して、仏のまこと一つを頂くことであります、そこに祈らずとても神やまももらんのめぐみが自然にあらわれて下さるのであります。

次に蓮如上人の仰せに「信心治定の人は、誰によらず、先ず見れば則ち尊くなり候。これその人の尊きにあらず、仏智を得らるるが故なれば、いよ〳〵仏智の有難きほどを存ずべき事なりと云々」とあります、又「たとい片目つぶれ、腰をひき候ようなるものなりとも、信心あらん人をばたのもしく思うべきなり」とも仰せられました。これらはこの願のめぐみをたたえられたものであります。

三十八、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の人天、衣服を得んと欲わば、念に随いて即ち至らん。仏の讃むるの如くならずんば、正覚を取らじ。

この願を受楽無染の願と呼ばれます。浄土に生れると快楽にきわみがありませんけれど、それに執着することがないようにあらしめたい、という願であります。

二十二願で申しました本願寺の能化職であられた法雲師の絶筆に「蓮華界裡の楽を好むに非ず」とありますのもこの願を光とされての御述懐でありましょう。私共の生活は、快楽があるとそれに執着し、それがかなわぬと自暴自棄におちます。これ全く煩悩の興盛のせいであります。そこでは楽がそのまゝ苦の種となります、そういう苦海の流転しかない私共への悲願がここに誓われたのであります。「久遠劫より流転せる苦悩の旧里はすてがたく」、見るもの聞くもの触れるものに執着してやまぬ者をかねてしろしめしての大悲大願であります。

ところの応法の妙服（法則にかなうた袈裟のこと）の如く、自然に身に在らん。若し裁縫、擣染浣濯（たたき染め、洗たくすること）することあらば、正覚を取らじ。

これは衣服随念の願と呼ばれます。釈尊が「比丘よ来れ」とお誡めになると、自然に袈裟が身にまといつくと伝えられますが、その様に浄土に生れた者には、衣服が思うままに現れ、裁縫も洗濯もいらないようにしたいという願であります。

さてこの願を信の上から現実の生活の上に味わいますとき先ず思い浮びますのが、伝教大師の「道心の中に衣食あり」の一句であります。この言葉を臼杵祖山老師は「道心さえあれば衣食に心配はいらぬというのでなくして、どんな境遇に処しても堪えて行けるということである」と述べられたと伝聞いたします。このことを私の上について味わいますと私は全く無道心であります、して見れば衣食住の一切は、すっかり白毫の恩賜で、仏よりの恩恵ばかりであります。全く仏に生かされている身で、冥見を謝すばかりであります。

三十九、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の人天、受くるところの快楽、漏尽比丘（煩悩を解脱した修行者）

四十、設い我れ、仏を得たらんに、国の中の菩薩、意に随いて十方無量の厳浄の仏土を見んと欲わんに、時に応じて、願の如く宝樹の中において皆ことごとく照見せんこと、猶妙鏡にその面像を覩るが如くならん。若ししからずば正覚を取らじ。

見諸仏土の願であります。三十一の国土清浄の願の別益であります。前の三十一願は浄土が清浄で、諸仏の浄土が自然に映えてうつって来るようにしたいと誓われましたがこの願では、諸仏の浄土を見たいとなれば、弥陀の浄土の宝樹の間に直ちに現れて、鏡で顔を見るようにあきらかに見えるようにしたいという願であります。即ち浄土に生れると、あらゆる聖賢の教、ソクラテス、キリスト、孔子、老子等々の教を知ろうとすれば色眼鏡でなしに、正しくあきらかに知れるようにしたいとの誓いであります。

三十一の願ではあらゆる教が自然に入って来るし、この願では浄土に居るまんまあらゆる教の中に入り、それを正しく理解出来るようにしたいという願であります。

（未　完）

○

『南瞑の果てに』を読んで

聚墨生

最近、終戦後二十年にもなるのにまだグアム島に日本兵が生きているという情報があって捜索隊が出掛けたが、空しく引揚げたらしい。その隊員の一人、皆川文蔵さんは、伊藤正さんと二人で、グアム島の戦闘が終ってから十六年目に見出された人である。

二人は敵をのがれ、飢えを防ぐために、たえず異状な緊張のもとに長年月を送らねばならなかった。その模様を皆川さんが告白した書が『南瞑の果てに』である。その中をひろって見よう。

○

「わたしのことを日本のロビンソン・クルーソーと人はいうが、そのロビンソン・クルーソーの生活をわたしたちはどれだけうらやましく思ったことだろう。

長いわたしたちの青春を通じて、わたしたちの頭と神経の八分がたを占領し、支配していたものは、見えざる追手の手に光る銃口であった」

○

「いかに意地っぱりであろうが、体力的に頑強であろうが、自分ひとりで生きてゆくことは出来ない。……やむにやまれぬ、絶対絶命の世界で、文字通り一蓮托生の生活をして行かねばならない……」

○

「わたしたちはパライモ掘りは例外として、パンの実を採るにしても、ヤシの実にしても、また、たまさかの牛や豚をとってくるにしても、エモノはすべて隠れ家に帰ってから等分に分け、分けたあとの料理は、それ〴〵の好みに従って、煮ようが、焼こうが、また一度に食べようが、十度に食べようが、銘々の自由にすることにした。

法然聖人も御臨末近くに、或弟子が聖人滅後の厠所についておたずね申すと

「たとい肩をならべ、膝を交じえてくらすとも、また互のあたたかみが通うほど近づいた生活をするとも、念仏のないところ千里万里のへだてが生じるが、よしんば賤が苫屋の生活であろうとも、念仏の声のするところそこが我がすみかである。厠所を一所にとどめてはならぬ」と答えていられます。

両聖人に導かれ護られ慰められての白道の旅、そこに永遠の伴侶を頂けますことは、独生独死、独去独来の三界孤独の身には、文字通りまたとないよろこびであります。

はじめは何もかも共同だったが、お互の好みにも、考え方にも違いがあるので、なか〳〵うまくゆかないことを知らされたからである。」

○

「とくに病気の時は心細い。たれかが病気になると、病人もつらいが、それに劣らず看護人もまたつらく心細かった。……たとえどんなところで生活するにしても、仲間がいるかどうかということは、生きるか、死ぬるかというぎりぎりの結着の運命にかかわる問題である。」

○

以上のような人間生活の限界状況の中で、性格も気質も違う人間同志の生活は、たええぬ対立で幾度か分れながらまた協力し、遂に互にその個人生活を認めながら共同生活を続けたのであるが、それを結びつけた太い綱は「仲間の有無」ということであった。

私共は、永遠の孤独ということは、堪えることの出来ぬこと、一大事であることを皆川さんの貴重な生命がけの体験に教えられるのであります。

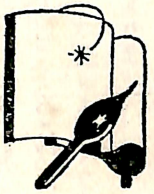
それにつけても、「一人居てよろこばば二人と思うべし二人居てよろこばば三人と思うべし。その一人は親鸞なり」の金言は、人の世に唯一無二の最大良友を恵まれるのであります。

○リヒテル（ドイツ詩人）語

人の悲しみを悲しむは凡人と雖もこれをよくす
そのよろこびをよろこぶは天使にあらざれば能わず

○宮城道雄（琴の名人）語

人々が悲しみあう声を聞くと陽の音がする
人々が喜びあう声を聞くと陰の音がする



あとがき

初夏の陽射しのきびしい頃となりました。日々に報ぜられるベトナムの状勢は、いよ〳〵悲惨なぬかるみの様相を呈しております。フランスから独立してほどなくベトナムは南北に分離し、更に内乱となり、帰すべき国の中心を失つた中で、仏陀を中心に信奉してその歩みを進める仏教徒の内から、真の平和と秩序の見出されることを祈念してやみません。

○　○

五月の初め、西元宗助さんの来訪をうけ、久々に談合、学生時代を語り、現在を語り、楽しい一夜をすごしました。

五月の第三日曜には、同朋会館の木村無相さんが来会下され、無相さんの真言か、真宗かで、度々往復し、遂に念仏の中に安らがれる姿を知らされました。又、岡山の光明園で宗教関係のお世話をして居られた時、癩疾の人々が、その難病のために、隣人や、親類や、兄弟、最后には母親からも見離されながらも、自殺すら出来ないで入園された人々の告白を聞かれて、驚かれたことを語られました。「よろずのことそらごとたわごとまことあることなき」底辺に立たれる人々に「ただ念仏のみぞまことにておわします」の光明の点ぜられることを念願申すばかりであります、しかもその姿がそのまゝ私自身の姿であることに再びおどろかされました。

○　○

「信仰と実人生」の近角先生の御講話は、先生が終生強くお教え下さつたものであります。死後の救いという方にのみかたよつて現実の生活が軽くなつてはいけない、画や書をかくにはカンバスや半紙がいるように、人生の上に信心は建現する、と身をもつてお説き下されたのであります。

「人間性と浄土教」の福島先生のお原稿は、京都の宮地さんのお世話していられた至心寮での戦後早々のお話であります。

「会者定離かねてありとは知りながら、昨日今日とは思わざりきに」とは法然上人の御入滅を北陸の地で聞かれた時の聖人の歌と伝えられますが、「知りながら、思われぬ身」の上に浄土の教が光の全分をあらわされるのであります。

「堂の鈴」は昨年四月に亡くなられた佐藤様の遺稿であります。あと二回続けさせて頂きます、有縁の方々のお味読を願います。

「四十八願」は、福島先生や易行院法海師や禰潜竜師や金子先生の御講話を参照しながら、そこに私自身に感受されたものを述べました、御判読下さい。

御案内

※毎月第一、第二、第三日曜、午后一時半　一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル　三筋目右入ル。
但し、七月十日第二日曜は、津市大谷町彰見寺の徳本会に参りますので、一道会は休みます。

※毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺。法話会。
市電御器所通り下車。

慈光第十八巻　第六号　昭和四十一年六月十五日　発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

定価　半年　二百円（送共）
一年　四百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話　八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番